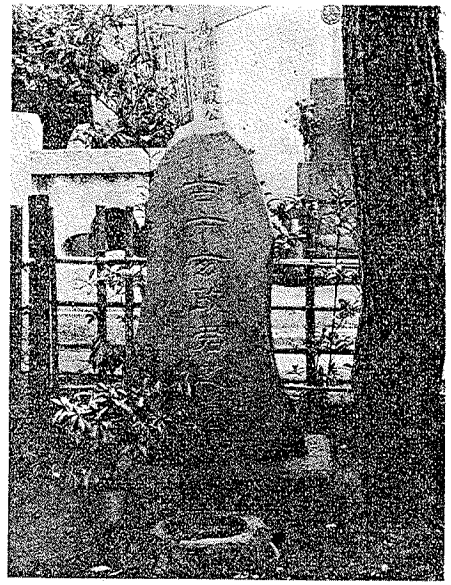
第一章　幼年時代

第一節　家　系

古市氏の先は、藤原武智麿より出づ。室町幕府に至り左京亮あり、鎌倉扇谷家の上杉定正に仕ふ。明應二年、定正の歿後、左京亮の子左近將監景治畿内に轉じ、大和の守護職古市城主松永彈正久秀に屬して古市に居る、仍て爾來古市を以て氏とすと云ふ。景治の子景末大和に生る、幼名は大助、次に主馬助と稱す。天正五年、松永氏亡び、尋で父景治病歿するや、景末河内に移り、農業に從事す。其の子大助河内に生る、初め諱は景孝、後、道生と改む。父の歿後京師に學び、醫を以て業とし、利庵と號す、德川幕府の初世に至り、紀州和歌山に移り住す。元和三年二月、其の子玄政和歌山に生る、幼名は大助、初め諱は景業、後蒲庵と號す。長崎に遊びて學を修め、群書に通じ、詩文を

善くし、最も醫術に長ず。寛永中、醫を以て武州川越藩主酒井忠世侯に召さる。寛文二年、忠世侯の孫、雅樂頭忠清侯の弟忠能侯の信州小諸に封ぜらるるや、隨從して之に仕へ、延寶七年九月、小諸侯の駿州田中城に轉ずるに及び、翌八年致仕して江戸に出で、處士として其の餘生を送り、元祿二年三月、七十三歳を以て江戸に歿す、芝三田寺町曹洞宗仙翁寺に葬る、之を中興の祖とす。



中興の祖古市玄政墓

玄政の子孝慈、初め諱は剛、字は宜住、幼名は大助、次に平三郎、後、藤之進と稱す。延寶九年三月、雅樂頭忠清侯の嗣子前橋城主酒井忠擧侯の召す所と爲り、儒官を以て祿百五十石を食み、使番上座に列せられ、江戸詰たり。和漢の學に通じ、詩文を善くし、著書數十卷あり、就中「前橋風土記」最も世に著はる。享保五年八月、忠擧侯の命を以て江戸淺草「崇福寺始源傳來之記」を撰し、忠擧侯の卒せらるるや、其の碑文を撰す、碑は淺草壽町龍寶寺に在りしも、今は他に改葬せらる。孝慈に二子あり、長を孝庚、次を孝矩と曰ふ。孝庚病身にして處士と爲り、醫を業とす。孝矩通稱は藤之進、兄に代りて家を繼ぎ、中小姓より表小姓と爲り、側用人格に進む。明和六年十月、江戸に歿す、年八十二、谷中大行寺に葬る。是より先、寛延二年酒井忠恭侯姫路に轉封す、孝矩乃ち姫路藩士を以て江戸に居る、嗣子なし、寶曆三年十月、同藩士太島九郎左衛門の二男源吾を養ひて子とす。源吾は前橋に生る、初め諱は敎雄、次に孝雄と改む、祿八十石を食み、近習頭並格に進み、文化八年正月七十二歳を以て江戸に歿す、谷中大行寺に葬る。亦嗣子なし、同藩士女屋篤敬の二男を養ひて子とす、通稱藤之進、諱は綏定、明和二年九月前橋に生れ、寛政三年四月、二十七歳を以て古市家に入る。才學あり、擢んでられて江戸藩邸の奥年寄、元締役等を勤め、奏者番格に列し、留守居格に進む。元締役は他藩に於ける勘定奉行なり。初め祿八十石を食み、尋で三回の加增を受け、總高二百石に達す、嘉永元年十二月、八十四歳を以て歿す、谷中大行寺に葬る。四女あれども男子なし、同藩士井上理左衛門昌行の二男斧三郎を養ひて子とす。斧三郎は享和二年十一月姫路に生れ、文化十三年十二月、十五歳を以て古市家に入り、定府として江戸詰たり。初め諱は昌敏、次に孝敏、後、孝友、通稱を藤之進と改め、老を告ぐるに及びて藤衛と稱す、識見高く、經世の才あり、小納戸頭取に任じ、使番格を以て祿二百石を食み、更に中小姓組頭、先手物頭を勤め、足輕弓組を統率し、又元締役として財政を掌る。當時江戸に於ける姫路藩邸は、大手前なる上屋敷、嫡殼町の中屋敷、巣鴨鷄聲ヶ窪の下屋敷の三ヶ所に在りて、孝

友は初め蠣殼町の中屋敷に居り、次に巣鴨の下屋敷に移り、元締役と爲るに及びて大手前の上屋敷に移る。文久三年、定府の士を姫路に移すに至り、古市家も擧げて江戸藩邸を出で、姫路城の廓内に住す。是歳孝友特に藩地に於ける奉行に任ぜられ、祿四十石を加增せらる。慶應元年、再び定府として江戸に赴き、上屋敷に居り、元締役たること故の如し。既にして王政復古と爲り、明治元年二月藩主忠邦侯江戸藩邸を朝廷に上り、越えて三年孝友再び一家を擧げて姫路に移り、姫路城の外廓なる通稱五軒屋敷の一に住す。是歳孝友老を告げ、餘生を姫路に送り、明治十一年十月三十一日、七十七歳を以て歿す、姫路上寺町大法寺に葬る。初め孝友江戸に在りて元締役たるの時、弘く諸藩の重役と交を訂し、時に紅燈綠酒の間に絃聲を聞き、或は同志と謠曲能樂の嗜好を共にし、又姫路藩抱力士兜山、高見山、相生、武者ヶ崎、增位山等をして其の邸に出入せしめ、屢〻宴席に侍せしむ、蓋し公私日常の生活、頗る華美なりしを知るべし。而して其の體軀雄偉、衣冠整齊、威あつて猛からず、寛裕人に接し、擧止節度あり、一藩の重役として、貫祿共に備はる。故を以て七代目團十郎の忠臣藏を演ずるや、自ら大石良雄に扮するに之を孝友の風丰に採りしと云ふ。千兩役者を通じての赤穗の重臣と姫路の重臣、古今の對照亦奇なる哉。

孝友亦嗣子なし、同藩士堤鴻佐の二男鐵三を養ひて子とす、鐵三は孝友の甥なり。初め孝友の古市家に入るや、養父綏定に四女あり、長女を鹿といふ、鴻佐に嫁す、鐵三は卽ち其の子にして、文政十二年九月江戸に生る。父鴻佐字は公愷、它山と號し、太田錦城の高弟にして、訓詁の學を排し、專ら利用厚生の實學を修む。越前侯に仕へて其の近臣たりしも、國老と意見を異にし、去つて江戸に在るや、偶〻姫路藩老河合寸翁と會晤して、寸翁の喜ぶ所と爲り、乃ち酒井家の儒臣として江戸詰を命ぜらる、既にして古市綏定の長女を娶り、古市堤兩家の婚嫁相通ずるもの玆に始まる。其の子鐵三の孝友に養はるるや年甫めて十五、天保十四年九月古市家に入り、後通稱を大輔、藤十郎、琢郎といひ、諱は初め淸坦、次に孝錫、後には孝と改む。文武に長じ、節義に富む、表小姓を勤め、又西洋流調練世話役たり。文久三年、一家擧げて姫路に移るや、藩黌好古堂學問所の授讀を拜命し、元治元年九月、山鹿流兵學指南の助手を仰付けられ、慶應元年再び定府として江戸に歸るや、同年十一月高島流調練肝煎を命ぜられ、尋で藩主忠邦侯の側役たり。明治三年一家再び姫路に移り、是歳養父孝友老を告ぐるを以て、四十二歳にして始めて家督を相續し、尋で復東京に出づ。明治十二年五月東京に歿す、年五十一、谷中大行寺に葬り、後更に染井墓地に改葬す。妻淸は同藩士種村又右衛門勝敬の妹、明治四十五年三月東京に歿す、享年八十、染井墓地に葬る。一男一女あり、男は卽ち公威先生にして、女は先生の妹洛子なり。

第二節　生　立

安政元年閏七月十二日、先生江戸蠣殼町の姫路藩中屋敷に生る。幼名は兵庫郎、次に造次、諱は孝肅、後、公威と改む、世阜、孤臺、不爭、玉泉等の號あり。安政二年先生甫めて二歳、其の十月江戸の地大に震ひ、人畜の死傷幾萬を算す。先生の中屋敷の邸宅は幸に崩壞を免れしも、傾斜甚しく、家人は前庭に疊を敷き、先生を擁して數日を送りしと云ふ。後幾もなく巢鴨の下屋敷に移りしも、先生五歳の頃、祖父孝友翁元締役たるに及び、大手前の上屋敷に轉住せられ、爾來先生は上屋敷に於て養育せらる。

上屋敷の構内には、藩士の居住する幾多の御長屋あり、軒を接して連り、其の構造も亦相似たり。一日先生門外に遊び、既にして家に歸るや、誤つて隣家に入る、隣家は空屋にして人影なし、祖母を求むれども在らず、母を求むれども在らず、先生驚き泣く。蓋し下屋敷より轉居の後、日尚ほ淺きを以て其の戸に惑へるなり、漸くにして其の惑へるを知り、事なくして歸るを得たるが、先生幼年時代の記憶は、實に茲に始まると云ふ。

文久元年、先生八歳を迎ふ。是歳酒井某と共に、先代藩主忠顯侯の長庶子稻若殿の娵友として御相手を命ぜらる。稻若殿は安政五年二月を以て生る、卽ち今茲四歳なり、而して先生等之に侍すること約八ヶ月にして、同年十月夭亡せらる、是れ亦先生幼時の記憶の一なり。

當時先生が上屋敷に在りて受けたる教育は、讀書と習字の頗る簡單なるものにして、讀書は毎日學問所に出で、四書五經の素讀を受け、習字は小西月舟氏より手本を授けられ、自宅に於て稽古するを常とす、而して先生は其の年齡に比すれば能書なりとの好評を博されたり。

文久三年先生十歳の時、一家を擧げて姫路に移り、爾來先生は藩黌好古堂に出でて勉學するを日課とせらる。當時好古堂教授には、國學一名漢學二名、外に武藝の師範若干名あり、而して同年七月、國學寮教授秋元安民氏罷め、春山乙彦氏之れが後任たり。春山氏は勝海舟先生の門下にして、砲術學、航海學、兵學、築城學を修め、蘭學、數學、天文學、經濟學等に通じ、殊に國學、哲學の蘊奥を究め、其の後進子弟を導くに舊套を脱したる新方針を以てしたり。先生の好古堂に學ぶや、時恰も春山氏の新方針に出でたる指導を受け、得る所甚だ多し。後年春山氏が人に向つて、余が教へ子の中、古市氏の如き人物を出せるは、啻に余の誇りとする所なるのみならず、實に我が姫路の面目なりと語られたるに徵するも、如何に當時の師弟關係の深くして、春山氏の指導が、又先生を薫化するもの多かりしかを知るべきなり。

慶應元年先生十二歳の春正月、熊谷某と共に、弓場始式の「矢申し役」を命ぜらる。姫路藩に於ては、藩主の在城に際すれば、毎年正月弓場始式を行はるるを例とす。式は素袍烏帽子に威儀を正

せる射手六人之を勤め、二人を一組とし、一人毎に各二本の矢を持ちて前後に立ち、前なる人先づ射て、後ろの人次に射る、少年二人矢申し役に選ばれ、紋附の振袖に麻裃を着け、前髪は後ろに垂らし、芝居に見る御小姓姿其の儘なるが、矢の當り外づれを見て君公の前に進み、跪きて當り矢のみを報告す。例へば前なる人第二の矢を外づし、後ろの人第一を外づせば、「前はハヤ、後ろはオト、當りて候」と申し、二人共に當り矢なれば、「前へ後ろ皆當りて候」と申す。先生の矢申し役を勤められたる此時、六人の射手一も外づれ矢なく、所謂皆中なりしを以て、射手大いに面目を施し、意氣揚々たるものありしと云ふ。

是歳慶應元年、先生の一家再び定府として江戸の上屋敷に歸り、祖父孝友翁は元締役たること故の如く、父孝氏は君側に出で、先生は勤學生を命ぜらる。勤學生は幼年子弟の名譽とする所、暇あれば終日上屋敷内の學問所に在りて勉學するを常とす。學問以外の劍術槍術等の武藝に於ても、先生努めて上屋敷内の稽古場に出でて之を勵み、劍術は特に本所なる幕臣小谷燕齋氏の道場に通ひて直眞影流を學び、又弓術をも志し、當時蠣殼町の中屋敷に太子流師範家のありたるに就きて教を受け、其の技漸く長ずるに及び稍慢心を生じたりとて、大いに祖父翁の叱責する所と爲り、遂に弓術を廢せらる。時に先生十三四歳にして、文武の研鑽に怠らざること斯くの如くなりしが、先生は又同年輩の竹馬の友星野錫氏と共に盛に運動遊戯を試みらる。其の頃幼年子弟の間に角力の流行するありて、先生は一方の大關たり、星野氏は他方の大關たり。又中屋敷に於て藩士の鐵砲射撃の練習あるに當りては、幼年子弟等擊劍道具を着け、隊を作つて擬戰を行ひたりしが、先生と星野氏は毎戰必ず其の隊中に見出されざることなかりしと云ふ。其の中屋敷の構内に一小丘あり、幼年子弟の遊戯場たり、一日星野氏丘上より飛び降らんとするの時、先生之を見て「待て待て」と制し、自ら丘上に駈け登るや否や、忽ち身を跳らして飛び降りたるに、過つて脚骨を挫折し、久しく千住の名倉に通はれたることありき。其の元氣の旺盛なる概ね斯くの如く、運動遊戯に於ても人後に落ちざらんことを期せらるること亦斯くの如し。即ち此意氣あつて、文に武に研鑽倦まず、夙に儕輩に擢んでられたる所以なり。